



TITLE:

ペッティの政治算術論

AUTHOR(S):

白杉, 庄一郎

CITATION:

白杉, 庄一郎. ペッティの政治算術論. 経済論叢 1943, 57(4): 309-329

ISSUE DATE:

1943-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132037>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第卷七十五第

統制經濟の諸概念……………高田保馬

ベッティの政治算術論……………白杉庄一郎

コンツェルンに關する覚え書……………靜田均

中小工業と問屋の機能……………田杉競

ゴットルに於ける經濟と社會……………杉原四郎

彙報

行發月十年八十和昭

ヘッティの政治算術論

白 杉 庄 一 郎

本誌六月號乃至八月號において私はウィリアム・ベッティがよつてもつて近代經濟學の始祖とさへ呼ばれるに至つた『租稅論』を中心として彼の經濟思想を檢討してきた。それによつて我々の知りえたことは、ベッティの『租稅論』その他の論著において我々は重商主義思想よりも深い理論的認識の芽生えを認めることができる、しかしそれはまだ重商主義の克服といふところまで行つてゐないばかりでなく、却つてこれに理論的基礎づけを與へるといつた意味をもつてゐた、實際『租稅論』には重商主義の純化徹底とも考へらるべき傾向が見られさへするところである。その點、私は『サー・ウィリアム・ベッティ傳』の著者フィツモリス (Edmond Fitzmaurice, The Life of Sir William Petty, London 1895) がベッティの『租稅論』はホッブスの影響を示してゐるとして次のごとく述べてゐるのは正しいと思ふ。曰く、「ホッブスが理論に描いたところをベッティは實際に適用しようとした。

『租稅論』はたえず廣範な本來の意味における國家權力すなはち進歩した政府がすべての臣民にその精力を拘束したり損傷したりする無能力を除去することにより、また租稅制度の全面的改革を通じて國家富源を積極的に開發することにより、さらに國家活動が教育や海軍ならびに商業知識を含めた多くの未だ等閑にされてゐる諸方向に擴張されることによつて與へることのできる利益を取扱つてゐる。」と(一八八頁)。實際、ベッティは『租稅論』

において當時ヨーロッパ諸國に行はれてゐた諸種の國家企業たとへば銀行業・金融業・保險業・專賣・救貧事業などを紹介しさへしてゐる(八二一―八三頁)。もつとも彼はこれらの國家企業のいづれについても積極的に獎勵してゐるわけではない。しかし同時にそのいづれについても一言の批判をも下してはゐない。したがつて、『租税論』全體の思想傾向より見て我々はむしろ彼がそれらを推奨したのではないかと推測すべき根據をもつのである。かくしてベッティは『租税論』においてもなほ多分に重商主義者の倂を残してゐると云はなければならぬ。しかしながら、ベッティが字義通りの重商主義者として登場するのは『政治算術論』(Political Arithmetick, or A Discourse concerning, the Extent and Value of Lands, People, Buildings, Husbandry, Manufacture, Commerce, Fishery, Artizans, Seamen, Soldiers, Publick Revenues, Interest, Taxes, Superlucration, Registries, Banks, Valuation of Men, Increase of Seamen, of Militias, Harbours, Situation, Shipping, Power at Sea & c. As the same relates to every Country in general, but more particularly to the the Territories of His Majesty of Great Britain, and his Neighbourhoods of Holland, Zealand, and France) にならうである。

(註) 『政治算術論』は一六七一年もしくは一六七一年から七二年にかけて書かれたと云はれて來たが、ハルの考證によれば一六七一年といふのは恐らくベッティがこの著作に着手した年であつて、その完成は一六七六年前とは考へられないといふことになつてゐる。しかして著作後それは手寫本の形で友人間に流布してゐただけで公刊されなかつた。友人たちは公刊をすゝめ、ベッティ自身も一六七九年に『租税論』の偽版が出たりなどしたので自己の監督の下に印刷した方が安全だと考へたこともあつたやうである。しかし彼はその一本を手記として國王に獻上しただけで、つひに公刊を思ひとどまつた。* England's Guide to Industry」といふ標題で著者名なしに現はれた『政治算術論』も彼の同意を得たものではなかつた。それが初めて著者名を公にして出版されたのは、彼の死後、一六九〇年のことである。ベッティの長男シエルボーン(Baron of Shelborne)は同書に國王への獻辭を書きその中でベッティが同書の公刊を思ひとどまつた理由とも考へらるべき點に言及して、「もしこの論文の説くところ

がフランスの怒を買ふ惧がなかつたならば、この學説はつとに世の光を見てゐた筈である」と述べてゐる。といふのは、この論文の實踐的動機がフランス制壓といふ點にあつたからである。そしてそこに我々は重商主義者としてのベッティの眞面目を見出すのである。

『政治算術論』の目的とするところは、國家の一員として共同の利害が如何なる狀況にあるかについて精確な眞理を知り、公共の福祉に關する危惧を打破するといふことであつた。當時イングランドの福祉に關する危惧が多くの人々の間に普及し一種の偏見となつてゐた。すなはち次のやうな主張が行はれてゐた、「土地の地代は一般に低下してゐる、そのため及びその他の多くの理由によつて全王國は日毎にますます貧乏になる、以前は金が豊富であつたが、今は金も銀も非常に僅少である、人民に對する事業や職業がないのに、しかも土地には人口が不足してゐる、租税は種類が多く且つ高くなつてきた、アイルランドやアメリカの植民地やその他の屬領はイングランドにとつて重荷である、スコットランドは何の役にもたぬ、貿易は遺憾ながら一般に衰頹しつゝある、海軍の競争ではオランダ人が我々に追ひつかうとしてゐる、フランスの貿易と海軍は急速に増大し、彼等が隣國に喰ひつかないのは彼等が溫厚だからにすぎないと考へられるほど富み且つ強力である、そして最後にイングランドの教會と國家はイングランドの貿易と同様の危險に瀕してゐる」と（序言）。これに對してベッティは、「眞實外國品の消費は最近過大となつてきた、もし器物の多くが貨幣のままに置かれてゐたならば一層貿易に役立つに相違ない、自然や舊い習慣や一般的同意のみの支配すべきあまりに多くの事柄が法律によつて規定されてきた」、のみならず内亂や惡疫や火災や外寇があるにはあつたが、しかもイングランドの福祉は進歩してきたとして次のごとく述べてゐる。「ロンドン」の建物は壯麗となつてゐる、アメリカの植民地は四百艘の帆船を使用してゐる、東印度會社の株式は資本金のほぼ倍額となつてゐる、確實な擔保を提供する者は法定利子で金を借ることができ

る、建築材料は（樫の木でさへ）ほとんど高くなつてゐないし、あるものは却つて安くなつてゐてロンドン、の復興に便である、取引所は従来と同じく商人で一杯であるやうに思はれる、従来に比し街には乞食は少く窃盜をもつて罰せられる者も少い、馬車の數や装具の華美は従前の比ではないし、公共演劇場も非常に壯大である、國王は事變前に比し強大な海軍と近衛兵をもつてをり、僧侶は富み、寺院は修繕が行届いてゐる、多くの土地が改良され、食物の價格は安く、ために多くの人々はアイ、ル、ランドの家畜の輸入を許すことによつて食物を一層安くすることを拒否するほどである。要するに、普通の勞をいとはないかぎり、誰も暮しに困らぬのである。若干の人々が他の人々よりも貧しいといふことは、曾つてもあつたことだし、將來もあるであらう、そして多くの人々が自ら不平といひ人を羨むといふことは世界と同様に古くからの害惡なのである。これらの一般的觀察や人々が普通の如く食ひ飲み笑つて暮してゐるといふ事實が、私に、イン、グ、ラ、ン、ドの利益と事情は決して悲觀すべき状態にないといふ確信を與へ、また私に勇氣を與へて出来れば他の人々をも慰めるやう試みさせたのである。」と（同上）。

右のごとくベッティは當時の悲觀論者に對してイン、グ、ラ、ン、ドの状態を樂觀した。しかしこの種の樂觀的な見解が悲觀論を克服しうするためには、それは單なる愛國的信念にとどまることなく、個人的恣意性を脱却した客觀的妥當性をもたねばならぬ。そこで彼はこの確信に客觀性を與へるために政治算術を適用するのであるが、その方法について彼はつきのごとく述べてゐる。「私がこれをなすにあつて採用する方法は今のところあまり普通ではない。單に比較級や最上級の言葉（Comparative and superlative Words）および知的論證（Intellectual Arguments）を用する代りに、私は（私が長い間めざしてきた政治算術の一つの見本として）私の言はうとするところを數量や重量や尺度の言葉（Terms of Number, Weight, or Measure）で表現するといふ方法を採用したからである。これは感性に訴へ

ることのできる論證 (Arguments of Sense) のみを使用し、自然のうちに實見しうる基礎をもつやうな原因のみを考察する方法であつて、特定の人々の變り易い精神や意見や嗜好や欲情に依存する原因は他の人々の考察に委せて置くといふ方法である。」と(同上)。つまり彼は國家社會に關する主觀的抽象的な形而上學的思辯を排して觀察と比較を基礎とする實證科學的方法として政治算術を提唱したのである。^(註一) けれど、觀察と比較とを基礎とする實證科學の方法は、自然科學を模範として精密性を追求した結果、必然的に數量的表現を企圖するに至つたのであつて、^(註二) 政治算術とは公共福祉に關する數量的研究であると云つてよい、言ひ換へると經濟現象に關する統計的研究のことである。かくしてベッティの政治算術はいはゆる經濟統計學の先蹤であつたのである。もつとも、統計的研究方法の始祖としては、ベッティよりもグラントの方がその名に値すると云はねばならぬ。事實、人口統計に關するかぎり、ベッティはグラントの補足者であつた。しかし、グラントはベッティよりも統計的方法においては卓れたものをもつてはゐたけれども、經濟學者ではなかつた。統計的研究方法を經濟現象の認識に適用したのはベッティであつた。その意味においてもベッティの政治算術論はきはめて重要な學史的意義を有するのである。しかし私がここで興味を有するのは政治算術的方法そのものではなくて、それによつて彼が論證しようとしてゐる思想内容である。

(註一) 政治算術といふ言葉は普通ベッティの發明したものである——しかし彼がそれを初めて活字にしたのは一六七四年に公けにされた『二重比論』(Discourse of Duplicate Proportion) に附されたニューカッセル公宛の手紙においてである——とされてゐる。サー・ウィリアム・ダウナントのごときも次のごとく述べてゐる、「我々が政治算術といふのは政治に關する事物の數字による推理方法 (the art of reasoning by figures upon things relating to government) のことである。この方法そのものは疑ひもなく極めて古くからあるものであるが、それを産業や收入のごとき特定の對象に適用するといふことはサー・ウィリアム・ベ

ツタイによつて始められたところである。……彼がそれに初めてこの名前を與へ、それに規準と方法を與へた。」と(Lavennant, *Political Arithmetic*, Works, I. pp. 128, 129)。しかしフイツモリスのときはベツタイが政治算術といふ語の發明者であるかどうかは疑はしい、おそらくそれは當時すでに一般の通用語であつたのであらうと云つてゐる(前掲一八三頁)。しかしこの語の普及がベツタイの努力に負ふものであることだけは疑ひないやうである。

(註三) ベツタイの政治算術は物理學的數學的精密性の要求から生れてきたばかりでなく、他面において解剖學との類比から生れてきたものであることも見逃しがたい。もともと醫者であり解剖學者であつたベツタイの政治算術は政治的解剖といふ思想と密接な關係をもつてゐたのである。彼は『遺書』の中に餘生に對する希望を表明して「研究や實驗に關して云へば私は今はそれを人民の解剖 (the anatomy of the people) と政治算術とに限らうと思ふ」と書いてゐるが(フイツモリス前掲三二四頁)「人民の解剖」といふのは政治的解剖といふのと同じ思想であり、政治的解剖の方法が政治算術にほかならなかつたのである。この點に關聯して見逃しがたいと思はれるのは、『アイルランドの政治的解剖』(The Political Anatomy of Ireland)——これは一六七〇年に書かれたが、一六九一年に初めて公けにされた——の序文である。そこで彼は述べてゐる、政治體の構造を知らずして政治を行ふのは、醫者の開業と同じく危険であつて、「解剖は醫者に必要であるのみならず、ありとしあらゆる哲學者に推奨すべきものであるから、私は政治學を本業とするものではないけれども、私の好奇心をみたすために慢然と政治的解剖に關する最初の論説を企ててみたのである。」と。そして彼は、解剖學の場合に於けると同じく、政治體の解剖にも實驗用の「政治的動物」がなければならぬと考へ、これをアイルランドに求め、かつその方法に關して次のごとく述べてゐる。「いふまでもなく、この新奇な解剖はいろいろの適當な道具を使はなくてはできないのであるが、私にはさういふ仕事に必要な多くの道具はなくてただ一本の普通のナイフと一片の繼片しかなかつた。けれども私の粗雑な近接作業でも、淋巴管や神經叢や脈絡膜や精液輸送管を見分けるまでの役には立たないにしても、肝臓や脾臓や肺臓がどのへんにあるかを知くらうのことは十分まにあふのである。それにしても、私がこゝに進んでなしたことでは他の人々によつて重視されるかどうか、否たしかに有用と考へられるかどうかを知らないまゝに、私はあへて一つの新しい仕事を始めたのである。それは立派な人々の手によつて訂正され擴大されるならば、我國の平和と豊富に資するであらうと私は信じる、それ以外に私の目的はないのである。」と。つまり、この書物におけるベツタイの實踐的關心もまたイギリスの平和と富裕といふことであり、そのための方策を彼はアイルランドについて研究しようとしたのであるが、その研究方法すなはち彼のいはゆる解剖の道具といふのは數學的方法にほかならなかつた。そしてその方

法がやがて政治的算術と呼ばれてくるのである。

二

さて『政治算術論』は公共の福祉に關して彼の到達した十箇の結論の證明といふ形で展開されてゐる。まづその第一は「領土せまく人口が少くとも、その位置や貿易や政策の如何によつては、その富と力とにおいて人口および領土の遙かに大きな國に匹敵することができるといふこと、そして特に航海および水運の便はそれに對して最も重要にして根本的な貢獻をなすといふこと」である。これを論證するためにペッティはフランスとオランダとを比較してゐる。フランスはオランダに十三倍する人口をもち、八十倍の耕地をもつてゐるが、十三倍も富強だとはいへず、況んや八十倍といふやうなことはなく、精々のところ三倍くらいである。しかしてオランダのこのやうな相對的富強は國土の位置や貿易や政策および特に航海ならびに水運に由來するといふのである。

國土の位置からしてオランダ人は他國人の追隨しえないやうな仕事をなし、これによつて他國人のできないやうな利益を得てゐる。ペッティがオランダの地理的利益としてあげてゐるのは次の諸點である。(一)オランダは低地であり豊饒にして肥沃である、ためにその土地は多數の人間を養ふことができ、その結果として人々は相互に相隣して生活し互にその事業を助けあふ。この點に關し彼は「一千人を養ふことのできる一千エーカーはそれ以上の効果をもたぬ一萬エーカーよりもまさつてゐる」としてその理由をあげて云ふ。「例へば一千人の人々が或る大きな工場を建ててゐるにしても、それらの人々がすべて一千エーカーの土地に住んでゐるならば、その十倍も廣い面積の土地に住むことを餘儀なくされる場合よりも、餘計な時間を使はないでもよいであらう。教區民の監督や牧師の經費は一方の場合よりも他方の場合に遙かに多額であらう、外敵はもちろん窃盜や強盜に對する相互防

衛の經費も同様である、加ふるに司法行政費も證人や當事者の召喚が容易にして出頭に經費のかからぬところや人々の行爲が知れわたつてゐて人口稀薄な地方に見ごとく罪惡や不正の隱蔽しがたい場合には遙か輕微であらう。最後に、人里はなれた場所に住む人々は自分自身が兵士であり僧侶であり醫者であり法律家であればならず、自分の家に長途の航海途上にある船のごとく、必要な食料品を貯藏して置かねばならぬが、かゝる食料品の失費は多大の空費であり無用である。」(第一章。(二)オランダは平地の國であつて何時も風が吹き通してゐるから何處にでも風車を建てることができる、そのため數千人の勞働が省かれる、「一人が半年を費して作つた風車は四人が五年がかりで行ふ勞働をなすであらう」からである。(三)「農業よりも製造業の方が利益が多く、製造業より商業の方が利益が多い」が、オランダは豐饒な國々を貫流する三大長流の河口に位してゐて、これらの河流の兩岸のすべての住民を農民として置き、自らはこれらの農民の商品の製造業者となり、その商品を殆んど彼等の欲するまゝの價格で世界の各地方へ賣捌き、それによつて利潤を得てゐる、要するに彼等はこれらの河流の通過する國々の産業の鍵を握つてゐるのである。(四)オランダにおいては仕事場や營業所にして航行しうる水面から一マイル以上も隔つてゐるものは殆んどない、しかして「水上運賃は一般に陸上運賃の十五分の一ないし二十分の一である」。(五)この國は云はば海中の島であり而も壕を作り溝を掘つた通過の困難な沼澤の中に位置してゐるので、國防が容易である。ベッティは廣漠たる平原國に比しこの國は四分の一の經費でもつて防衛することができるとも述べてゐる。そのほかオランダは(六)港灣上の利益、(七)漁業の利益、(八)航海用品による利益をもつとなし、最後に云ふ、「航海業や漁業において優位を占める人々は他の人々よりも世界中のあらゆる地方へ行く機會が多く、到るところで何が不足してをり何が過剰であるか各人民は何をなすことができ何を欲するかを知る機會が多く、

したがつて全世界産業の問題または運送業者 (the Factor, and Carriers for the whole World of Trade) となる機会が多い。この理由により、彼等は各地の土産品を國內に運搬して製造品となし、再びそれを原生産地へさへ運搬することは我々の目撃する通りである。」と(第一章)。

以上ベツティはオランダの地理的利益について述べたのであるが、進んで産業上の利益を詳論する。オランダの産業の中軸は航海業であつた。したがつて問題は航海業の利益といふことに歸着する。航海業の利益として彼は次の諸點をあげてゐる。

「農夫と海員と工匠と商人とはあらゆる國家の大黒柱である。他のすべての重要な職業はこれらの人々の虚弱や失敗から發生するものである。そして海員はこれら四者のうち三者を兼ねてゐる。けだし勤勉にして利發な海員は皆ただに航海者であるのみならず商人であり且つまた兵士であるからである。

「イングランドの農夫は一週に約四シリングしか儲けないが、海員は賃銀や食料(および云はば住宅等)その他の調度品の形で十二シリングも儲ける、それで一人の海員は實際上三人の農夫にあたるわけである。

「他の人々の職業は本國に限られるが、海員の職業は全世界のどこにも限らない。そのため、産業がこゝかしこで時々(彼等のいはゆる)死滅の状態に陥る場合にも世界のどこかでは確かに産業は常に十分活潑にして食料品は常に豊富なのであるが、その利益を享受するのは航海業を支配する人々であり且つ彼等だけなのである。

「産業の究極の大結果は富一般ではなくて、特に、他の財貨のやうに壞れたり變つたりしないで何時何處でも富である銀や金や寶石の豊富である。これに反して葡萄酒や鳥肉や獸肉などの豊富は單に今こゝで、富(Riches but hic et nunc)にすぎない。それゆゑ、國に金や銀や寶石などを貯藏せしめるやうな商品を生産したり又さうい

ふ種類の産業に従事することはなかんづく有利である。しかしして海員の勞働や船舶の積荷は常に輸出品の性質をもつたものであつて、その輸入品を超える部分は本國に貨幣その他のものを賣すのである。(同上)

一面においてベッティはオランダの小國主義を讚美してゐるやうにも見えるけれども、それは一にイギリスがたとへフランスに比べると小國ではあつてもフランス以上に富強たりうることを論證せんがための強い筆勢の餘勢とも見るべきものであつて、彼の重商主義思想は右の章句において蔽ふべくもなく明瞭である。彼にとつても「銀や金や寶石が普遍的な富(Universal Wealth)である」と考へられた。そしてそれを獲得するためには、農業よりも製造業の方が利益が多く、製造業よりは商業の方が利益が多く、なかんづく航海業が最も有利なものと考へられたのである。

最後にベッティはオランダの繁榮に對する政策上の原因としてオランダ人の間に見られる宗教的自由・不動産登記制度・銀行制度・傭兵制度等を問題としてゐる。なかんづく注意に値するのは商工業と宗教との關係に關する見解であるが、ここでは割愛して、傭兵制度に關する所説を一瞥して置きた。そこには重商主義的迷妄ともいふべきものがはれるからである。彼は述べてゐる。「オランダ人は騷亂と危險の最大にして而も利潤の最も少い二つの商賣には手を出さない、その第一は普通の兵卒稼業である。彼等はそんなものはイン、グラ、ンドやス、コッ、トラ、ンドやドイツから傭つて來て一日六ペンスを拂つてその生命を賭けさせ、自分は安穩に最も賤しい者でさへその六倍も儲けるやうな商賣に従事することができ、のみならず外國人を兵士として採用することによつて彼等の國はますます人口が多くなる、といふのはかゝる外國人の子供はオランダ人であつて商賣に従事するし、また新しい外國人が無限に入國を許されるからである。その上、これらの兵士は暇を見て少くとも彼等が消費す

るものに相當するくらいの仕事をする。したがつて、このやうに外國人を兵士として使用することによつて、彼等はその國の人口を殖やし、特別の經費をかけないで自國民を危險と窮乏から免れしめるのである。」と『政治算術論』(第一章)。おもふに、人口増加策としての傭兵ならばともかく、兵役忌避の思想は強國たりうる資格を缺くものであるにもかゝらず、ペッティがオランダの政策に贊意を表してゐるやうに見えるのは奇異の感なきをえない。たしかにそれは重商主義的迷妄といはなければならぬであらう。重商主義的迷妄といふ觀點から見ても、一層我々の注意を惹くのは次の言葉である。

「オランダ人が手を出さない今一つの商賣は、古來の傳統的生業 (the old Patriarchal Trade) たる牧畜業および穀物栽培業の大部分である。彼等はいかういふ職業をデ、ン、マ、ルク人やポーランド人にまかし、後者から若い家畜や穀物を獲得する。さてこゝで我々の知る如く、商工業や新奇の工藝が増加するにつれて、農業は減退するであらう、或は農民の賃銀は騰貴するに相違ない、したがつて土地の地代は下落するに相違ない。……もし現在一日に八ペンスそこらを儲けてゐるにすぎないイングランドの總ての農民が商工業者となり一日に十六ペンス (普通の賃銀は二シリングないし二シリング六ペンスであるからこれは高きにすぎず賃銀ではない) 儲けることができるならば、農業を止めて土地はたゞ放馬・乳牛・草花園・果樹園などに使用する方がイングランドの利益であらう。」(同上)

このやうにペッティの重商主義思想には徹底せるものがあつた。オランダが國土狭小にして人口少く、農業の犠牲において商工業の發展を圖らざるをえず、そこに重大な脆弱點を包藏してゐたことは毫も反省されてゐないのである。しかしながら、ペッティの云はんと欲するところは要するに「領土小さく人口が少くとも、位置や産業および政策によつて大國に匹敵することができる、しかして航海や水運の便はそれに對して最も重要にして根

本的な貢獻をなす」といふことであつたのであり、何よりも先づイギリスの航海業をオランダのそれのごとく發達させねばならぬといふことであつたのである。そしてこれが『政治算術論』における第一の命題であつたのである。

三

『政治算術論』に見られるペットイのオランダ觀を以前の重商主義者たとへばトーマス・マンのそれとくらべて異つてゐると思はしめる點として我々は、ここにおいてもオランダはなほイギリスの學ぶべき手本と目されてはゐるが、オランダに對する敵愾心は消失してゐることに注意しなければならぬ。イギリスは一六七四年の第二次ウエストミンスター和約によつてオランダを制壓してしまつたのである。十六世紀にスペインを破り、今またオランダ制壓に成功したイギリスが迎へなければならなかつた第三の敵はフランスであつた。イギリスはフランスを打倒するために、十七世紀の終りから十九世紀の初めナポレオンの敗退するまで百數十年の歲月を費すのである。ペットイの『政治算術論』はイギリスのフランスに對する挑戰の思想的前驅と見ることが出来る。すなはち彼は、「ある種の租税や公課は王國の富を減少せしめるものではなくてむしろ増加せしめる」といふ第二の結論につづいて、第三に「フランスは自然的にして永久的な障礙があるために現在または將來におけるイギリス人またはオランダ人ほど海上で有力となることはできない」といふことを論證してかかる。

まづフランスの國王はイギリスとの戦争において兩國の艦隊の戦ふ機會の最も多い北方海上に大船を收容しうる良港をもつてゐない。のみならず、「軍艦や大砲は自分で戦争するものではなくて働いてそれを使ふ人間が戦争するのである」が、フランスの國王はイギリスの國王の艦隊と對等の艦隊に乘組ませるに足るだけの海員をも

たないし、またもつことができない。その最も重要な理由は、フランスの海運業は増加せしめられえないからである。けだし、「フランスは國內に穀物・家畜・葡萄酒・鹽・麻布・紙・絹布・果物などあらゆる種類の必需品を十分にもつてゐる。それで彼等は重量または容積の大きい多くの商品を輸入するための海運をあまり必要としない、また葡萄酒と鹽を除けば大嵩の輸出品をもたない。……そしてこれを扱ふ船舶は大部分オランダおよびイギリスの船舶であつて、彼等はすでにこの事業を我がものとしてゐるばかりでなく、フランス人よりもそれを維持して行くに適してゐるが、恐らく永久にさうであらう。それは次の理由による、(すなはち)、(一)フランス人はイギリス人やオランダ人のやうに安い食物を攝つたり、少人數で航海したりすることができない。(二)フランス人は良好な海岸や港灣をもたないためイギリス人やオランダ人に比し二倍の經費を支拂つてもその船舶を港に繫留することができない。(三)港の數が少く且つその相互の距離が遠いため海運關係の船員および商人が他の場所におけるが如く容易にして廉價かつ有利に通信しあひ援助しあふことができない。以上の理由により、彼等の海運業は自力的にさほど發達する見込がなく、況んや世界の運送業者としてイギリス人やオランダ人を凌駕する見込はないのである。」(第三章)

フランスに對する對抗意識はさらにベッティをして第四に「イングランド國王の人民と領土は富と力といふ點から見てフランス國王の人民と領土に比し大差なし」と結論せしめる。まづ彼は兩國の領土を比較して實質的には大した差異がない、イギリスの國王の領土がフランスの國王の領土に比し多少狭少であるにしたところで、兩國王は共に十分利用しきれないほどの廣大な土地を所有し、未だ人口過剰に陥つてゐないのだから、廣狹の差は我々の問題に大した影響はないといふ。つぎに人口を見るに、イングランドの國王は全地球上に約一千萬の臣民

をもち、フランス國王の臣民は約一千三百五十萬であつて、その割合はまづ十對十三と考へてよい。彼は、この割合ならば、イギリスは島國である故に國防上フランスと對等の力をもちうるとなしてゐる。

なほ人口に關しベッティは、「各國王の有する臣民數を知ることが極めて重要であるけれども、問題がその富と力に關する場合には、臣民のうちどれだけが支出する以上に儲得し、どれだけがそれ以下の儲得をなすかを知ることゝまた重要である。」となすのであるが、しかもイギリス領にはフランス領よりも多くの「餘剩利益生産者」(superlucraters)が存在するとして、さう推定せしめる若下の理由をあげてゐる。なかんづく注意すべきは次の二點である。(一)フランスの貧民の受取る賃銀は一般にイングランドにおけるよりも少い、しかも彼等の食料品は一般にフランスの方が高いと云はれる、さうだとすれば、イングランドにはフランスよりも多くの餘剩利益(superculation)があるといふことになるであらう。(二)イギリス國王の臣民の消費するところはフランス國王の臣民の消費するところと大差がない、消費されるためには先づもつて獲得されねばならぬ、イギリスの一千萬人の獲得するところがフランスの一千三百萬人の所得に等しいと云はねばならぬ。フランスの國王や貴族の方がイギリスの國王や貴族よりも富裕にして華美であるやうに見えるが、それは何もフランス人民が一層富裕であるといふことの論據とはならない。人民の富と專制君主の富とは異なるからである。

最後に、ベッティはイギリス人の享受する餘剩利益がフランス人のそれよりも多い理由を問題としてゐる。第一に考ふべきは、イギリス國王の領土は可航水域より十二マイルしか離れてゐないのにフランス國王の領土は六十五マイルも離れてをり、ために「イギリスはフランスよりも廉價に外國で栽培されたり製造されたりした一切の大嵩の商品の供給を受けることができる」といふ事情である。しかし一層重要なのは輸出外國貿易である。ペ

ッテイもまた重商主義者と同様に輸出外國貿易を重視して述べてゐる。「各國民の富は主として金や銀や寶石その他の普遍的な富を殆んどもたらさない普通の肉類や飲物や衣料などの國內商業よりはむしろ全商業世界との外國貿易に對して各國民のもつ分前に依存するのである」と（以上第四章）。彼はまた別の個所でなかんづく東印度および西印度貿易を重視して、「我國の東西印度貿易のもたらす商品の輸出は、イングランドの富の試験される試金石であり、王國の健康の調診さるべき脈膊である」とさへ云つてゐる（第三章）。

四

以上イギリスとフランスとを比較して、イギリスの富強があへてフランスのそれに劣るものでないことを論證したベッテイは、轉じてイギリスが一層富強になるための道を探究して、「イギリスの偉大を妨害するものは偶發的なものであつて除去しうべきものにすぎない」と結論してゐる。

まづ、「イギリスの偉大にとつての第一の妨害は、それに屬する領土があまりに遠く離れすぎてゐて、海により數個の島嶼と地方いな云はば數個の王國と數個の政府に分たれてゐることである」。おもふ、領土の分散性といふことは大英帝國の最初からの弱點であつたのである。ベッテイの當時、イングランドとスコットランドとアイルランドとはそれぞれ獨立の立法權を有し、利害を異にして、外國人同志のごとく否ときとしては恰かも敵國人のごとく相互の貿易を封鎖し妨害しあつてゐた。加ふるに植民地と本國との間に對立があつた。この事實に顧みてベッテイは述べてゐる、「分散した遠方の小政府は自衛すること殆んど不可能であるから、これらすべてを保護する責任は首長國たるイングランドにかゝらざるをえない。したがつて、すべての比較的小さな王國や屬領は利益ではなくして事實上は損失である」と。その際いふまでもなくベッテイは主としてイングランドの立場

に立つてゐるのであるが、しかし帝國內部の不統一ないし不平等が他の領土に與へる不利益を不問にしてゐるのではないのであつて、たとへば本國による植民地貿易の獨占が植民地に與へる不利益について明言してゐる。第二の妨害としてベッティは國王の權力・議會の特權および法律解釋の相違をあげてゐる。第三は雜居や移住の缺如による自然的合同の缺如といふことである。第四は課税の方法が不公平にして不便であること、第五は地方行政區なかんづく人民代表權が不平等であるといふこと、第六は宣戰權と徵稅權とが同一人の手にないといふことである。しかしながら、ベッティは以上の妨害はすべて自然的なものではなく偶發的にして除去しうるものであるとなしてゐる(第五章)。

第一の妨害が最も重要なものと考へられるのであるが、これに對して彼はイングランドとスコットランドとアイルランドとの三つの王國が合同して一王國となり議會によつて代表されるやうにしては如何と提案してゐる。しかもイギリス帝國の不統一にもとづく不利益は「等しく全帝國を代表するが一つは國王によつて選ばれ今一つは人民によつて選ばれる二つの大會議(Grand Councils)」を作ることによつて緩和されると云つてゐるところを見ると、合同の提品は植民地にも及ぶかに解される。事實、フィッツモーリスの『ベッティ傳』の中に引用されてゐるイングランドとアイルランドとの合同を提品した手稿の中にベッティは次のごとく書いてゐる。

「イングランドとアイルランドとの合同は何を意味するか。合同した兩人民の富は双方別々のそれよりも速かに増加するであらう、したがつてそれに比例してその收入も増加しうであらう。合同した兩人民の政府は一層廉價となり一層安全となるであらう。アイルランドを富裕にすれば、これに反した條令が制定されるにじたところで、必ずやイングランドを富裕にするであらう。この合同によつてアイルランドの叛亂が防止されるならばイングランドによつて利益である、以前の叛亂とくに最近の叛亂はイングランドによつて大損害であつた。……………國王は二王國間の關稅を喪失するであらうが、それは合同を形成する議會によつて容

易に且つ喜んで補償されるであらう。國王の大權も何れの王國の貴族や兩院の特權もそれによつて制限される必要はない。合同にもかかはらず、必要とあらば、いづれの王國の如何なる地方においても、異つた法律を制定することもできよう。……ウニールスが合同の好結果の手本であるごとく、アイルランドはスコットランドやニュー・イングランドやその他の陛下の外領地(out-territoires)によつて手本となるであらう。陛下のすべての領地が合同されるならば、その富強は當然フランス王國に匹敵する。アイルランドを合同しないよりはむしろ、その住民を絶やし、土地と家屋を放棄し、人民と共に一切の動産を撤收した方がよからう。それが從來行はれて來なかつた原因は實に兩王國の多數の成員の杞憂と極く少數の成員の利益および最惡の成員の杞憂や利益である。……アイルランドとイングランドとを合同することが悪いとすれば、イングランドそのものをも從來のごとく植民地化して多くの小王國にした方がよいやうに思はれる、……この合同は戦争や殺戮なしに眞實の海上權を獲得しオランダ人の海上貿易を覆す見込のある方法なのである。」(二七七—七八頁)

『政治算術論』においてもベッティは、一方においてイングランドとスコットランドとアイルランドの合同を提唱すると同時に、他方においてはスコットランドの高地々方および特にアイルランドを捨てよといふ提案をなしてゐる。すなはち曰く。「もしアイルランドおよびスコットランドの高地々方のすべての動産と人民がグレートブリテンの他の地方へ移されるならば、國王とその臣民はそれによつて攻撃的にも防禦的にも現在よりは富裕となり強力となるであらう。」「事實、私は多くの賢明な人々が、イギリス人はアイルランドにおける叛亂を防遏し鎮壓するために蒙つた非常に大きな損失を數き、その國における五百年間の努力と苦心とに對して臣民に酬いられた利益が如何に少いかを考察しつゝある場合に、次のごとく云ふのを聞いてきた、然り私は賢明な人々が、(大いに悲觀して)つぎのごとき希望をもち、すなはち、(アイルランドの人民が救助されるならば)島は水の中へと沈んでしまへ。ところが、この點に關して私は心中おだやかならぬものを感じたので、山岳重疊たるあの島を水の中へ沈めることなしに右の希望の利益が事實上獲得される方法の夢想に心を馳ますに至つたの

である。あの島を水の中へ沈めるといふことは大分むづかしいであらうと思ふ、けだしオランダの技師はその沼澤を乾澤することができるとあらうが、しかも私はその山岳を沈めうるやうな技術家を知らないのである。」しかしてベッティは人民と財産を撤收してしまつたならば、残つたアイerlandの山河は領土の擴張を欲するどこかの國家に賣つてもよいと考へてゐたやうである。アイerlandが他國民の手に渡ればイングランドにとつて危険ではないかといふ反對に對して、彼は次のごとく答へてゐる、「如何なる國民がそれを購入するにしても、その國民は（その購入によつて分割されるから）統一された状態にある現在よりは、イングランドにとつて厄介でなくなるであらう、またアイerlandはフランスやフランスほどイングランドに近くはないのである。」と（第四章）。しかしながら、この種の提案はどこまでもさきに見たと同じ精神において行はれたものであるといふこと、すなはち合同と放棄とのいづれかを選べといふ意味のものであつたことを忘れてはならないであらう。

同じことはアメリカにおける植民地についても云へる。しかし『政治算術論』においては、スコットランドやアイerlandの場合と同様、否むしろ植民地に關しては特に、合同の不可能な場合の對策として提唱した方策が前景に押し出されてゐる。すなはち彼は植民地の整理を提案して次のごとく述べてゐる。「過剰な領土の土地は賣り、人民はその動産と共に他に移してもよくはないであらうか（煙草や砂糖などを栽培してゐる）アメリカの植民地におけるイギリス人は、どれくらい土地が彼等の利益に適するかを計算し、その上でその居住者を質的にも量的にもその割合まで縮小してもよくはないであらうか。ニュート・イングランドの人民について云へば、私は、彼等が（この二十年來彼等自身のなしてゐる提案にしたがつて）オールド・イングランドに移されることを望むのほかない。もつともその場合には、彼等は、彼等が現在相互に認めあつてゐる以上に、信教の自由を認められなければならない

ない。」「非國教徒も、公共の安全を維持すべき合法的權力の維持に必要な經費を負擔する以上、寛大に取扱つてよいでなからうか。」(第五章)

合同と二者擇一的にはあつたにもせよ、とにかくアイルランドの放棄や植民地の整理を提案してゐるベツティは、少くともそのかぎり、大英帝國主義者でなかつたことが知られる。しかし、ニュー・イングランドの人民をアイルランドに移住させるといふのは、かつてクロンウエルの計畫した事柄でもあつた。一六五〇年クロンウエルの提案に對してニュー・イングランドの多くの人々は條件さへ整ふならば移住してもよいと答へたが、翌年に至り志を翻して、計畫は實現を見ずに終つたのである。植民地問題に關してクロンウエルの思想に共鳴するものをもつてゐたベツティは、前者について云はれるのと同じ意味において(カンニングガム『イギリスの産業と商業の發達』一九三—一九四頁)、大英帝國主義者でなかつたと云へるであらう。彼は別の個所で「これ以上一フイートの領土をも求めてはならぬ」と明言してゐる(『未刊文書集』第一卷二六二頁)。ベツティは英國の偉大を植民帝國としてよりは商業帝國の方向に期待してゐたやうに思はれるのである。惟ふに、商業帝國は大英帝國の一面ではあつたがその全部ではない。英國の膨脹は單なる商業帝國としてではなくて、その必然的歸結としての植民帝國としてであつた。周知のごとく、イギリスが大英植民帝國の建設に乘出したのはエリザベス時代からであつた。そしてイギリスの膨脹は以後第一ステュアート王朝の時代にもクロンウエル時代にも中斷されることなく繼續してゐる。王政復古もまたイギリス膨脹史に一新紀元を畫した時代であつて、イギリス人のインド征服とアメリカにおけるアングロサクソン支配の基礎はチャルス二世の時代に置かれたとさへ云はれてゐる(カンニングガム前掲一九九頁)。したがつて植民地問題に對するベツティの懷疑的な態度は、當時のイギリスにとつては、反動的な意味しかもつてゐないと云はなければならぬであらう。彼はアイルランドに廣大な領地を有する土地貴族であつた。自己の

所有地と密接な關聯を有するアイルランド問題に對する深い關心が、大局の透視を困難ならしめたと云へはしないかと考へられるのである。

しかしながら、こゝに強調して置かなければならないのは、ベッティが植民地問題に對して懷疑的な態度を採るに至つたのは、必ずしも重商主義に對する批判的な精神からであつたとは云へないといふ點である。さうではなくて、彼においては純商業的發展を旨としたオランダに倣はんとする意欲が強すぎたのである。植民地問題に對する懷疑的な態度をもつてゐたにせよ、彼もまた大英帝國に對する思想的協力者であつたことに變りはなかつたと云はなければならぬ。けれど、商業帝國は大英帝國の本質をつくしたものではなかつたにしても、その重要な一側面であることに變りはなかつた。のみならず『政治算術論』においても、彼はイギリスの富と力はこの四十年間に増加したと云ひ、領土の擴張をその一證となしてゐる(第六章)。彼はより以上の領土を不要と考へ、既得の權益の整理を必要と考へたにすぎないとも云へるのである。しかし彼がフランスをイギリスの來るべき第三の敵とにらんでゐた點についてはすでに述べた。彼はフランスを制壓すべき方途をオランダのごとく外國貿易を發展させることに求めたのである。

實に、オランダに倣ふことによつてイギリスはフランスを制壓しようといふことを論證することが、『政治算術論』の目的であつた。^(註) イギリスには現在よりも多く稼ぐことのできる人手が遊んでをり、且つ何時何處でもこれを使用するに足る職業がある(第八章)、國民産業を營んで行く上の貨幣に不足もなければ(第九章)、全商業世界の貿易を營んで行くに足る資本も有つてゐるといふところから、彼は結論してゐる「イギリス國王の臣民が全商業世界の全般的貿易を獲得することは不可能でない否きはめて可能な事柄である」と(第十章)。私が、ベッティはしばしば近代經濟學の始祖と呼ばれることがあるが、しかし根本においてはどこまでも重商主義者として大英

帝國の建設に對する協力者であり、しかもトーマス・マンなどの場合におけるとは異つた段階におけるイギリス重商主義を代表するとなす所以である。

(註) ちなみにベツティが武力によつてではなくてフランスとの同盟によつてフランスを制壓しようと考えた點は注意に値するであらう。フランスを援助することによつてイギリスの海上權を確立するといふのである。彼はジェームズ二世に奉つた建議の覺書に次のごとく記してゐる。

「もしینگランド國王が收入のうち三百萬を投ずるならば、きはめて容易に、立派な軍艦に乘組んだ約三萬五千人からなる海軍力を維持することが出来る。

「もしスペイン人やオランダ人やハンブルグ人やデンマーク人やブランダルグ人がフランスに對して同盟を結ぶならば、そしてもしこれら總ての國民の船舶がフランス人が(マルセイユやツローンの船舶に對しては地中海で他の用途をもつてゐるから)オランダとサン・セバスチヤンの間にもつてゐるものの約二倍になるならば、フランス人は右の同盟を無効ならしめるイギリスの三萬五千人に援助を懇請するに相違ない。

「イギリス人はその海軍力及びその港灣の使用に對するフランス人のこの必要に乘じて正當に次のものを獲得することが出来る。(i)十萬家族のユグノー、但しその財産ともであつて、半分はینگランドに半分はアイルランドに移植する。(ii)海上に勤務する三萬人年八九ヶ月分の俸給として約百萬。(iii)フランス船に勤務する二萬人の糧食および被服の代價として二十萬ポンド。イギリス人をして依然その用務のためにあらゆる種類の船員を自ら供給するをえせしめること。

「フランス人は、(i)アメリカの漁業をイギリス人に讓渡すること。(ii)そのすべての葡萄酒および酒をイギリス船に積込むこと。(iii)自國の貨物といへども地中海以外の海上においてこれが運送に従事せざること。(iv)軍艦の建造を停止すること。(v)コペンハーゲンおよびカレールの間で取得しうる一切の港灣においてイギリス人を援助すること。注意。イギリス人は艦上でのみ開ひ陸岸で關つてはならぬ。

「イギリス人は、(i)東印度におけるボーティンガルの權利・イスパネヨラ及びキューバ・鮮漁業・ノルウエー産の木材の運送を獲得しなければならぬ。(ii)そしてアルジェ・チュニス・トリポリなどは平和を保ち、フランス人に自由に使用せねばならぬ。(iii)もしイギリス人が右にあげた港灣・支拂および貿易を獲得するならば、フランス人が陸上で何を得意と意に介する必要はない、そんなものはイギリス人の欲するところでない。『未刊文書集』二六〇一頁」

これはきはめて蟲のよい空想的な提案であるとも云へよう。しかしそれは一面において「これ以上一フイートの領土をも求めてはならぬ」といふベツティの平和的思想を背景とあつた提案であつたことがきつてゐる。彼はフランスとの同盟を提唱しながら、「同盟國を援助するために何人をも送るなかれ」とも云つてゐるが(同二六一頁)、これは「イギリス人は艦上でのみ開ひ陸岸で關つてはならぬ」といふ格律とともに、イギリス人の傳統的戰略とも云ふべきものを表現してゐると云つてよからう。